

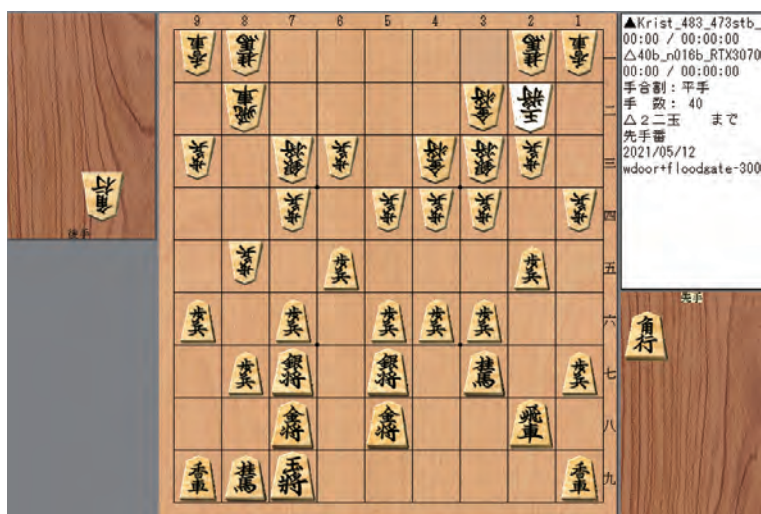
# 仕掛けの時機 ~チャンスに仕掛ける~

- 兵は拙速（せつそく）を聞くも  
未（いま）だ 功（こう）の久（ひさ）しきをみざるなり

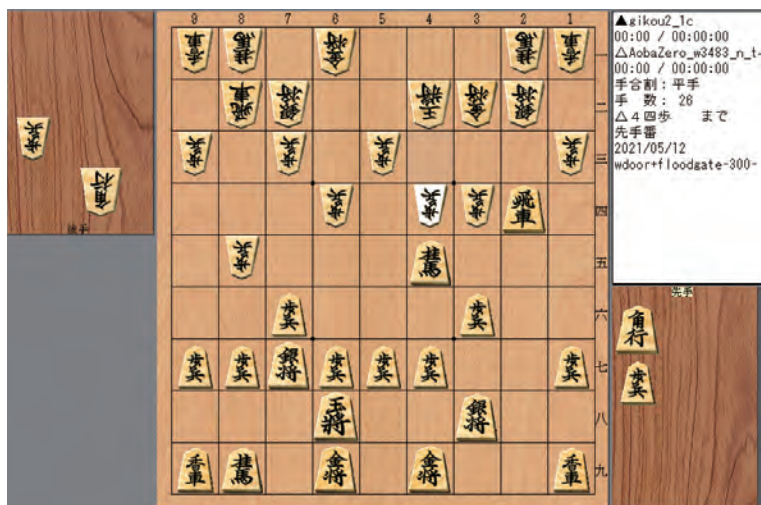
これは孫子の兵法からの言葉で、作戦に多少の不備はあっても、チャンスとみたら素早く戦いを起こすことが大切という意味です。

将棋でも王様をガッチリ囲ってスキをなくして攻めるのが理想ですが、相手も玉を囲うし攻めに備えるのが普通です。

なので自分と相手との陣形をよくみて自陣が堅ければ仕掛ける、相手に大きなスキがあれば仕掛けるような判断が必要になります。  
実例をみてみます。



左図では後手は金矢倉の完成形。対して先手は囲いの途中な感じ。  
実戦は先手がそれでも果敢に▲4五歩△同歩▲7一角△7二飛▲2六角成と仕掛けましたが、以下△7五歩▲同歩△8四銀と仕掛けを逆用されて、先手陣の弱さを突かれる結果になりました。  
このように相手が堅く自陣は弱い場合の仕掛けはなかなかうまくいかない。



左図では先手が玉形が弱いながらも相手陣にスキがあるとみて仕掛けた局面。現局面は桂が取られそうなので▲5三桂成と相手陣の形を乱して攻めるしかありません。以下△同玉▲2二飛成△同金▲3一角で一目決まりに見えますがそこで△4二飛が好防。以下は△5六歩などが厳しく後手の勝ちになりましたが、先手の玉形がもっと堅ければ、細い攻めをつなげて先手が勝ち切っていた可能性があります。



左図は玉の堅さは同じぐらい。ですが2三の地点が大きな弱点とみて仕掛けるパターン。  
▲3五歩△同歩▲4六銀と仕掛ける。右銀の働きの差で先手有利。

●仕掛けないという英断



左図は角換わり将棋。角換わりの仕掛けはかなり難しい。仕掛けてから玉を囲う。良い形を作るために仕掛けることも多い。  
図から仕掛けるとしたら▲2六飛として桂頭を守ってから次に▲3五歩を狙う。だが△5五銀とされると玉頭で戦いが起きてしまう。なので先手は▲6八金～▲3八金として自分からは仕掛けなかった。かといって千日手にするでもなく最後は▲6七角の自陣角から戦機を作り出し勝ち切りました。